

令和5年度 周南市立秋月小学校 研究主題

主体的に学び続ける子どもを育てる授業づくり
～「振り返り」へ導くはたらきかけの研究～

I 研究主題設定の理由

どっぷりと学びに浸からせる時間と同じくらい、学習活動を客観視して、自分の学びを俯瞰して考える時間が必要である。俯瞰して考えた結果、自分に変容していることに気付いたり、みんなで学ぶ一体感が楽しいと思えたりするだろう。毎時間の授業で感じることはできないかもしれないが、それらにふと気付いた時に、子どもは学び続けることの楽しさに気付くのかもしれない。学び続ける楽しさに気付いた子どもは、主体的に自分の言葉で考えを表現したり、友達の考えを真剣に聞こうとしたりするだろう。学級全体にその雰囲気が広がったときに、わたしたち教師も「主体的に学び続ける子ども」とはこういうことか、と納得できることを期待して、研究主題を設定した。

II 研究の視点

1 昨年度までの研究を引き継いで

昨年度から「振り返り」に焦点を当てて研究を進める上で、以下について検討し、共通理解を図ることとした。

(1) まとめと振り返りの違い

まとめとは、振り返りの前に行われるもので、全体で、本時で身につけるべき知識・理解を確認することである。一方、振り返りは、まとめの後に行われることが多く、個人で、学習活動を通して考えたことを記述することである。このように考えると、直前に教員がまとめた言葉を引用して「～が分かりました。」と書き換えただけの文章は、振り返りにはなり得ない。

(2) 振り返りに書く内容

子どもたちの発達段階に合った振り返りの内容があるため、担当する学年に合わせて振り返りの書かせ方は工夫していかなければならないが、以下の3つの視点で書かせていくこととする。

- ①「～に気を付けるとうまくいく」など、どのように考えたのかを振り返ること
- ②「他にはどんなときに使えるか」など、学びから見つけたことを振り返ること
- ③「自学ノートで～を練習したい」など、もっとこうしたいという思いを表出させること

(3) 振り返りの共有

短い時間で自分の考えを整理して書き出す能力を育てるためには、書く時間の確保と言語化して書き出す活動の積み重ねが必要である。

友達の書いた文章を読むというインプットは、自分の考えをつくるアウトプットにつながっていくだろう。また、「書いたら、共有」は合言葉である。その時間内に子ども同士で読み合うだけでなく、次の時間の導入に教師が取り上げることも共有になる。ノートを交換して目の前にいる友達の文章を読んだり、ICTを活用して、短時間に多くの友達の文章を読んだりすることも、次の書く活動において視点を広げることにつながる。

2 今年度何を研究するか

昨年度は、副主題を「子どもから引き出したい振り返りの吟味」とし、指導案に児童の言葉で振り返りを記載した。振り返りを考えることを通して、教師が本時の主眼をより明確にして授業を行うこと、子どもの立場で授業をつくること等の成果があった。また、多くの子どもたちが、教師が設定した振り返りに近づくことができていた。

一方、文章を自分の力で書き進められない、要点をまとめられないといった子どもがいることも課題であった。この課題の解決に向けて、子どもたち全員がより自己の学びを見つめる振り返りが書けるようにするために、教師のどのような「はたらきかけ」が必要なのだろうか、どのような授業デザインをするとよいのだろうか。今年度は、振り返りへたどり着くまでの教師のはたらきかけについて研究していきたい。

(1) 振り返り前の声掛け

「今日の授業の振り返りをしましょう。」という言葉だけでは、教師の理想とする振り返りを書くことができる子どもは少ないだろう。振り返りを書かせる前に、教師はどのような言葉をなげかけるとよいのだろうか。

「〇〇という言葉を入れて書いてみよう。」「前回の実験と比べて、どんな違いに気付いたのか書いてみよう。」など、書く視点を与えることによって、子どもの思考がはたらき出す。学びを焦点化する一言を振り返りの前に入れることによって、子どもが書く振り返りの内容も的確になってくるのではないだろうか。また、何を書いていいのかわからないという子どもや、だらだらと長い文章を書き要点をまとめられない子どもに対しても、有効な手立てとなると考える。

(2) 子どもを学びの主人公に！

これは、昨年度の校内研修授業において、指導者の先生が教えてくださった言葉である。終末の5分の振り返りを充実させるためには、それまでの流れで、子どもがどれだけ本気になっていたかが大切だと教わった。

問いが生まれる仕掛けを教師がつくり、子ども自身が問いをつくったという満足感のある導入になっているか。子どもが考えたいと思えるような、子どもの思考の流れに沿った主発問になっているか。子どもたちが納得できる言葉で、学習のまとめを提示できているか。

指導案検討を昨年度以上に丁寧に行うことが、教師の授業力を向上させ、子どもを学びの主人公にする授業づくりに向け研修を進めることとした。

Ⅲ 研修方法

- 授業研究会の協議内容や方法を工夫したり、講師を招いて理論を学んだりする。
- 指導案検討、研究授業を行い、児童に還元できているか検証する。
- 「授業のルール8か条」「秋月小学校スタンダード」を加筆・修正する。
- 実践記録や活用した資料を蓄積していくために、研究集録を作成する。

IV 研修計画

講師を招いての授業研究を年間3回（6月、9月、2月）、教員が一人一回の公開授業を行う。

V 研究の実際

(1) 第1回校内研究授業6月22日（木）5校時

3年生国語科「調べて書こう、わたしのレポート」

本単元では、相手や目的に沿って分かりやすい内容になっているかを考える活動を通して、調べたことをレポートにまとめる力の育成をねらいに進めてきた。単元を通して、誰に何を伝えるのかをテーマに一貫性をもたせることで、子どもたちは自分の考えを見つめ直しながら学習を進めることができていた。また、振り返りに「なぜ・何が・どんな・どのように」などの具体的な内容を問うようにした。そうすることで、「伝えたいことを決めて、メモから選ぶようにしないとバラバラになってしまうから、気を付けたいです。」などと、その考えに至った理由や根拠を示しながら、自分を振り返ることができていた。

本時では、手本となっているレポートのメモを見てどのように整理すると、相手に分かりやすく伝わるかを話し合った。その話し合いを基に、自分のメモを見つめ直すような発問をした。授業の中で考えてきたことをもう一度自分の場合で考えるようにすることで、授業の中で扱われた言葉や考えを用いながら振り返ることができていた。しかし、自分のメモになると、何がよくて何が悪いかが分からず、振り返りに戸惑う児童もいた。十分に自分のメモについて考える時間を確保できなかったことにより、自分事として捉えきれなかったと考える。一人ひとりが自分事として振り返ることができるよう、具体的にどうすれば良いかを考える時間を確保することを大切にしていきたい。

(2) 第2回校内研究授業10月12日（木）5校時

1年生国語科「乗り物のことを調べよう～いろいろなふね～」

今回の授業では、振り返りの前に「3つの船の似ているところはどこ」という発問をした。授業の導入で客船とフェリーボートの振り返りと似ているところを見つけることで、本時の漁船も「やく目」「つくり」「できること」の3つになるのではないかと考える児童が多かった。

振り返りでは、「漁船は魚をとるための船ということがわかりました。」ということを書いている児童が大半であった。中には、「3つの船の似ているところは、やく目、つくり、できることがあることです。」「漁船は客船とフェリーボートと同じでやく目、つくり、できることがあった。次に勉強する船も同じかな？」と過去の学びと結び付けたり、次の学びに繋げたりする振り返りを書いている児童もいた。

(3) 第3回校内研究授業2月8日（木）5校時

6年生体育科「ワンキャッチバレー」

今日のゲームを通して発見したことを振り返るために、発見カード（振り返りカード）には、3つの視点を設けた。（個人、チーム、前時の自分と比べて）毎時間自分の振り返りを蓄積していき、前時の自分の振り返りをすぐに確認できるように、タブレット端末への入力ではなく、ワークシートに記入することとした。1,2時間目の振り返りでは、「ボールを上手くコントロールできない」「チーム

でラリーが続かない」などの振り返りが多かったが、授業が進むにつれて、「ボールをコントロールさせるためのボールを当てる位置が分かった」「チームで声を掛け合うとラリーが続いた」などと、発見カードからも技能の上達を見取ることができた。また、振り返り内容を発表したり、次の時間の導入で紹介したりすることで、「アタック」「ブロック」「速攻」などの用語を知るきっかけとなり、児童の振り返りの言葉を増やすことにつながったと思う。児童は、毎時間授業の終末に振り返りを書くことが身に付いているため、教師からの発問はなく、振り返りの時間に入ることもあった。振り返りの3つの視点は示しているが、「今日はどんなゲームにしたかったか」「チームの作戦を生かすことができたか」などと、発問することで、感想だけでなく、振り返りを書くことができた。

VI 研究の成果と課題

授業者が「振り返り」へ導くはたらきかけを意識して授業を行うことで、子どもたちが、学び続ける楽しさを実感できるようになったのか、1年間の研究を振り返っていきいたい。

今年度の研究の視点の一つ目に、「振り返り前の発問」がある。振り返りを書かせる前に、授業者が子どもに書かせる視点を与えることによって、振り返りの内容を的確にすることを目指していた。授業を参観したとき、授業者によって振り返り前の発問に対する意識に差があったように思う。「振り返りを書きましょう」とだけ発問している場合、多くの子どもは授業で感じたことを好き好きに書く。それだけで悪いわけではないが、「今日学んだことを次にどう生かしたいか」など次時に目を向けた発問をした場合には、子どもが本時で学ぶべきことは何であったか、次にすべきことは何かと思考して振り返りを書いていた。つまり、振り返りを何のために書かせているのかという授業者の意識が、子どもの書く振り返りの内容の質に表れていたのである。

また、振り返り前の発問にこだわって研究をしていく中で、振り返りの内容の質を豊かにするためには、授業デザインが大切だと考えさせられた。授業デザインとは、授業の導入・展開・終末をどのように作っていくかという授業づくりのことである。つまり、授業者が振り返りをどう書かせるかよりも、子どもが豊かに振り返りを書くために、授業者がどのように授業をつくるかということが大切だと気付かされたのである。

これは、研究の視点の二つ目である「子どもを学びの主人公にする」ということに関係している。子どもを学びの主人公にするためには、教師が授業力を高めていく努力が必要である。今年度の授業研究では、国語科と体育科の授業を行った。どの授業においても、教科の本質を考え、知識や技能を身につけさせるための単元構成や本時で深めるところはどこなのかなど、授業者を中心に熱心に研究を重ねる先生方の姿が見られた。これこそまさに、教師が授業力を高め、子どもを学びの主人公にできるようにと研鑽する姿である。

振り返りを手立てに研究を始めて二年が経ち、授業者にも子どもにも振り返りは書くことがスタンダードになりつつある。二年間の研究の上に来年度の研究が積み上がるように、この課題を改善するためにできることを考えていきいたい。子どもたちが何をどのように学んだのか自分自身で客観視できる力を育てていきいたい。